

論文

De se 解釈を求める動詞について

大 野 裕*

要旨

形式意味論における命題態度をめぐる議論の一つに、自分自身に関する、つまり *de se* の信念に関するものがある。本稿では、*de se* 態度としての処理が必要となる文脈が不定詞補文など統語的な特性によって規定できるとする分析に対して、日本語の *de se* 構文は統語的な類ではなく意味論的な類としてとらえられるべきであることを論じる。

キーワード

形式意味論, 命題態度, *de se*, 補文構造, 指標

目 次

1. 命題態度と不透明な文脈
2. *De se* 態度
3. 日本語における命題態度と指標表現
4. 日本語における *de se* の解釈
5. まとめ

1. 命題態度と不透明な文脈

自然言語の意味を形式的に記述しようという営みの中で、*de re* の命題態度 (propositional attitude) と *de dicto* の命題態度と呼ばれてきた問題がある。この 2 つの解釈の間の違いを示す例文¹⁾としては、

- (1) a. 彼は明けの明星は明けの明星だと信じている
b. 彼は明けの明星は宵の明星だと信じている

という対を挙げることができる。「明けの明星」と呼ばれる天体と「宵の明星」と呼ばれる天体

* 立命館大学理工学部教授, 立命館大学日本語教育センター長

はどちらも金星という惑星を指示しているが、実際には (1a) の命題は同語反復的に真であるのに対し、(1b) の命題は当該の人物の頭の中の整理のされかた次第で、真にも偽にもなりうるということが指摘されてきた。論理的な言語分析の祖である Gottlob Frege は、この事態は、「明けの明星」「宵の明星」が主文に現われる

- (2) a. 明けの明星は明けの明星だ
b. 明けの明星は宵の明星だ

という文を考えた時に、(2a) は必然的に真であるのに対し、(2b) がそうではないことであることの反映だと考えた。つまり、「明けの明星」と「宵の明星」という 2 つの表現は私たちの世界で外延 (Bedeutung) は同じだが内包 (Sinn) は違っており、引用文の中では内包が問題となってくるのだと主張したのである。

現実世界で同じ物を指示する 2 つの表現を交替させることのできない「～と信じている」のような文脈は不透明な文脈であり、そこに現われる表現は、その不透明さの中で完結しているか、それともその不透明な文脈の外まで「光を放って」いるかの 2 つの解釈の可能性を持つ。不透明な文脈の内部で処理すべき場合が *de dicto* の解釈、不透明な文脈を離れて通用するような場合が *de re* の解釈と呼ばれる。

この問題のより現代的な議論は、Quine (1956) によって行なわれた。「～と信じている」というような文脈の中に存在量子子が現われた文の解釈を考えてみよう。Quine が分析に用いたのは英語文であるが、英語と日本語では数量化構文が大きく異なるので、元の議論に寄り添うために、ここでは英語の例文を参照する。

- (3) Ralph believes that someone is a spy.

Quine 自身は採用しない分析であるが、直感的には、この文の 2 つの解釈は、以下のような述語論理的な書きかたで表わすことができる。変数束縛のスコープにより、(4a) が *de dicto* の解釈、(4b) が *de re* の解釈である。

- (4) a. Ralph believes: $\exists x$ (x is a spy).
b. $\exists x$ (Ralph believes that x is a spy).

不透明な文脈で起こる問題として、次に Quine が取り上げたのは以下の二つの文である。

- (5) a. ラルフはオートカットがスパイだと信じている
 b. ラルフはオートカットがスパイではないと信じている

これらの文の意味するところを考えるために、Quine は次のような状況を設定した。

一人の茶色の帽子をかぶった男がおり、ラルフはその男を何回か怪しげな状況下で見たことがある。どんな状況であったかはここでは立ち入らない。ラルフがその男がスパイであると疑っている、とだけ言っておこう。さらに、ここに一人の灰色の髪をした男がいる。ラルフはおぼろげながら彼のことを地域社会の重要人物であると認識しているが、その男を見たことがあるのは浜辺で一回だけだと思っている。さて、ラルフはあずかり知らないことだが、今述べた二人の男は同一人物なのである。この男（バーナード・J・オートカットという人物である）のことを、ラルフはスパイだと思っているとすることができるだろうか？

補文主語の「オートカット」が両文で *de dicto* の解釈を受ければ、ラルフは完全に矛盾する考えを頭の中に持っていることになる。一方、「オートカット」が *de re* の解釈であれば、ラルフの頭の中は統合性を保持していることにはなるが、ラルフはオートカットという名が指示する対象についての認識は全く持っていないことになる。

不透明な文脈をめぐる議論において Frege はドイツ語を、Quine は英語を用いた例文で考察を進めたが、上でいくつかの例文を日本語で示したように、思考や心理などを表わす補文構造を持つ自然言語ならどの言語であっても同じように不透明な文脈が提供されると考えられる。

2. De se 態度

これらの *de re* および *de dicto* の命題態度に関する議論を踏まえた上で、命題態度を持つ人物が自らについて考えたり信じたりする事柄については、さらに論考が必要であることが指摘されてきた。この議論の端緒となったのは Perry (1979) の冒頭で語られた次の逸話である。

私はある時、こぼれた砂糖がスーパーマーケットの床の上で線をなしているのを、レジ

の高いカウンターの間を自分のカートを押しながら追いかけたことがある。袋がやぶけてしまった客を見つけて、床が大変なことになっていることを告げようと考えたのである。私がレジの横を一周するたびに、砂糖のすじは前より太くなっていくのが分かったが、なぜか私はその人には追いつけないようであった。やがて私は真相に気がついた。私自身が、私が探していた買い物客だったのである。

ここに描かれた状況の中で、「私」は最初、客の砂糖の袋がやぶけて床を汚していると思った。この考えは間違っただけではなかったが、私自身が床を汚しているとは考えていなかったわけである。追跡をやめるという行動の変化を引き起こしたという点で、考えの変化があったことは確かである。しかし、Perry の主張では、新たにいただくに至った信念の中に現われる「私自身が」とか「自分が」という指示表現を同一の人物を指示する他の表現（「この場所をつい先ほど通った買い物客」などが考えら得るだろう）に置き換えると、的確に考えの変化を表現できなくなるので、ここで用いられた「私自身が」や「自分が」という表現は必須的な指標表現 (essential indexicals) とでも呼ぶべき特別な扱いが必要であると Perry は述べた。このような、保持された態度の対象となる命題が「自分について」であるかどうかということが重要となる場合が、*de se* 態度の問題と呼ばれるものである。

その後の議論の中で、このような信念の自己帰属 (self-ascription) の分析の中で大きく取り上げられた考えの一つは、いだかれた信念は命題という 1 つの項ではなく属性と属性保持者の 2 つの項に対しての態度の表明なのだという考えである。ただ、上に挙げた Perry の例については、信念の対象が 1 項の命題ではなく 2 項の属性と属性保持者の対であると結論づけるための議論としては弱いと思われる。Perry が描いた現実世界の状況下で「私」と同一指示になる他の表現への置き換えができず、そのために平板な命題としてではなく別な形で態度の対象を捉える必要があるとしても、それはおそらく Rooth (1985) 以降の前提と焦点に関する一般的な議論の中に取り込んで考えることができるだろう。つまり、自分に関する (*de se*) の信念の特殊性を根拠に、それを命題ではなく属性と属性保持者の対に対する態度であると考えする必要はないと考えることができる。実際、自分以外に関わることで、Perry が語ったのに類似した状況で、何らかの形で古典的な命題よりも豊かな構造を態度の対象として設定しなくてはならない場合がある。次のような話を考えてみよう。

私はある時、こぼれた砂糖がスーパーマーケットの床の上で線をなしているのを、レジの高いカウンターの間を自分のカートを押しながら辿ったことがある。袋がやぶけてしまった客を見つけて、床が大変なことになっていることを告げようと考えたのである。

私がレジの横を一周するたびに、砂糖のすじは前より太くなっていくのが分かったが、なぜか私はその人には追いつけないようであった。やがて私は真相に気がついた。私のすぐ後ろに、ずっと私の夫の太郎が静かにカートを押しながら私に付いて来ていた。夫もまた砂糖を1袋カートに入れていたが、その袋がやぶけていたのである。太郎が、私が探していた買い物客だったのだ。

この場合も、Perry が示した状況と同じように、私は真相に気がついた時点で追跡は中止される。行動の変化を引き起こしたという意味で、信念の変化があったということになるが、「太郎が、私が探していた買い物客だったのだ」という気づきは、私自身に関わるものではない。それにも関わらず行動の変化が引き起こされたのは、探していた客が見知らぬ人ではなく、私の見知った人であったからで、その人と私との関係を考慮して、それまでとは違う行動様式を取ることができる、あるいは必要である、ということ私が認識したからである。しかしそれは「太郎が、私が探していた買い物客だったのだ」という文の意味ではない。このことを考えると、元の Perry の例の「私自身が、私が探していた買い物客だったのだ」という文についても、「自分が」「私自身が」という表現が使われているからというその点だけで特別な扱いをする必要はないと考えることができる。

De se に関する特別な扱いが必要であるか否かについては、議論が分かれている。狭義の言語学の分野での議論としては、*de se* の解釈は義務的な同一指示の問題として扱えるという可能性もある。例として、Ninan (2009) が示した次の例を考えてみよう。

ジョンは酒に酔ってテレビを見ている。テレビでは、もうすぐ行なわれる選挙に出馬しているさまざまな候補者の演説をやっていた。ジョンは一人のとりわけ魅力的な候補を見てその候補が選挙に勝つだろうと考えるようになった。その候補は、しかし、ジョンその人だったのである。彼はひどく酔っていたので、自分自身が問題の候補だとは気付かなかったのだ。実は、彼は自分の当選についてはちょっと悲観的になっていて、「私は今度の選挙には勝てないだろう」とひそかに考えてすらいた。

この状況で、(6a) が真であるか、少なくとも真になるような読みがあると多くの人は考えるが、(6b) は明らかに上記の状況では偽だと判断される。

- (6) a. John expects that he will win the election.
b. John expects to win the election.

(6b) の文が真となるためには、ジョンが自分についての (つまり、*de se* の) 考えを持っている必要があると Ninan は言う。注意すべきなのは、ここで *de se* の解釈が必須となるのは、意味解釈としての要請ではなく、統語論的な分析の当然の帰結であることである。つまり、一般的な分析では (6b) の文の補文には音形を持たない空範疇の主語があるとされるが、それが義務的に主文主語によってコントロールされるということの帰結として義務的な同一指示が意味解釈にも受け継がれるのだと言えるだろう。

Chierchia (1989) は、上記の *expect* のような動詞が *de se* の解釈を要求することに関して、イタリア語など他言語における同様の現象を考察することを通じ、*de se* の解釈が音形を持たない空範疇に関わる統語構造と密接に結びついていると論じた。これは統語論と意味論の相互の自律性について大きな含蓄を含むものであるが、そのような主張の妥当性の検証には、述語の項が比較的自由に省略される、つまり音形を持たない空範疇が頻出する、日本語のような言語を観察することが有効であると考えられる。

3. 日本語における命題態度と指標表現

日本語の例で、たとえば願望の「たい」の分析を考えてみよう。「たい」は音韻論的、形態論的には動詞に接続する形容詞化接尾辞であるが、意味としては主語にたつ人物と命題の間の二項関係として記述することが可能で、統語的にも命題部分を補文構造として表示するような分析が可能であろう。個人述語である「たい」を他の人称で用いるために動詞化接尾辞を付けた「たがる」も同様である。

- (7) a. 私は [φ 東京に行き] たい
 b. 彼女は [φ 東京に行き] たがっている

「たい」「たがる」文の補文の内部構造としては、よりどころとする理論の求めに応じて、音形を持たない主語を有する「文」の形をしていて、補文主語が主文主語と義務的に同一指示となっていると考えるか、これが主語を持たない「動詞句」レベルの構成素であり、この動詞句が意味的には命題ではなく属性を指示していると考えることができる。

「たい」「たがる」のように述語の形態論的な一部分となっているような場合は、上に述べたような統語論的な解決が十分可能であるが、表層的な統語表示においても補文構造が存在していると考えられるような場合、つまり、時制辞や補文標識を持つ補文構造を伴う命題態度表明

文ではどうであろうか。

定形補文、つまり、時制辞を持つ補文の中では、基本的に同一主語制約は適用されない。

- (8) a. 花子は [太郎が東京に {いる, いた}] と {思っている, 考えている, 信じている}
 b. 花子は [自分が東京に {いる, いた}] と {思っている, 考えている, 信じている}
- (9) a. 花子は [太郎が東京に {行く, 行った}] かどうか {知らない, 考えている}
 b. 花子は [自分が東京に {行く, 行った}] かどうか {知らない, 考えている}

これらの例では、補文内に「いる／いた」「行く／行った」のように現在と過去の対立する時制辞を置くことができることから明らかのように、補文は独自の時制を持っていると考えられる。このような補文内には、(8a), (9a) が可能であることから分かるように、主文とは異なる主語を自由に置くことができる。また、(8b), (9b) に見るように、主文と同一指示の補文主語を「自分が」という形で表わすことができる。さらに、(10a, b) に見るように、この補文主語の位置は音形を持たない要素を配置することも可能である。

- (10) a. 花子は [φ 東京に {いる, いた}] と {思っている, 考えている, 信じている}
 b. 花子は [φ 東京に {行く, 行った}] かどうか {知らない, 考えている}

この場合、音形を持たない補文主語がだれを指示するかは先行する文脈によってある程度決めることができる。たとえば、「太郎は実際には名古屋に行ったのであるが」とか「太郎は、だれにも自分の行き先を告げなかった。だから」等に後続するとしたら、補文の空の主語は太郎と同一指示であると解釈されるであろうし、「花子は実際には名古屋に行ったのであるが」とか「花子の日程はすべてマネージャーが決めているので」等に後続するのであれば、補文の空の主語を花子と同一指示とする解釈が容易になるだろう。

先に挙げた Ninan と似た状況で日本語の時制補文に現われる指標表現の振る舞いを見てみよう。まず、テレビに映っているのが自分だと認識していないという特殊な状況ではなく、ごく単純にテレビを見ている人物とテレビに映っている人物が全く違うという場合を考えると、(11a) のように補文の時制が現在形である場合は、「自分が」が主文主語の太郎と義務的に同一指示になることについては想像に違わず母語話者の直感はほぼ安定しているが、(11b) のように「彼が」といった明示的に三人称代名詞的要素が現われた場合は、筆者の調査では、これ

が主文主語と非同一指示になると判断する話者と、同一指示でも非同一指示でもよいと判断する話者がいる。前者のタイプの話者の持つ文法では、ロゴフォリック (logophoric) な「自分が」²⁾ を用いることのできる環境で「自分が」を用いなかったらその補文主語はロゴフォリックな解釈を受けられないという制約が働いているのに対し、後者のタイプの話者の文法には、そのような制約が存在していないのだと見ることができる。(11c) のように「その男が」といった確定記述表現に関しては、どの話者に関しても、主文主語との同一指示の解釈は成り立たない。(11d) のように主語が空範疇である場合は (11b) と同様に、主文主語と非同一指示になると判断する話者と、同一指示でも非同一指示でもよいと判断する話者がいる。

(11) 太郎_tは(ぐでんぐでんに酔っ払いながら)テレビでその候補_kの演説を見て、

- a. [自分_tが選挙に勝つ(だろう)] と思った
- b. [彼_{k/t}が選挙に勝つ(だろう)] と思った
- c. [その男_kが選挙に勝つ(だろう)] と思った
- d. [ϕ _{k/t} 選挙に勝つ(だろう)] と思った

Ninan が考えたような、本人の自覚なしに自分自身がテレビに映っているのを見て、期せずして自分自身についての考えをもつに至るような状況はどうであろうか。この状況は、言い換えれば、態度保持者の意識とは別に指標 t と指標 k が同一指示である場合である。(11a) の文では、「自分が」に関して、ロゴフォリックではないが主文主語によって長距離束縛される解釈を多くの話者が受け入れる。つまり、偶然の同一指示を多くの話者が受け入れるわけである。(11b) の文では、もともと「彼が」に対して反ロゴフォリックな解釈を求める話者も、偶然の同一指示は許容する。もともと「彼が」に対して反ロゴフォリックな制約を持たない話者は、当然のことながら偶然の同一指示も問題とならない。(11c) の文は、だれもが偶然の同一指示をまさに偶然であるという理解のもとに許容する。音形を持たない (11d) についても、(11b) と変わるところがない。

英語と日本語の思考動詞の例文に関する分析を端的にまとめると、英語の *expect* の補文では、音形を持たない代名詞が *de se* の解釈 (自者としての解釈) を要求するのに対し、日本語の「思う」の補文では、確定表現が *de aliis* の解釈 (他者としての解釈) を要求する、ということになるであろう。日本語のこの文型において *de se* の解釈を要求する制約が見られないのは、日本語の照応形の束縛が長距離にわたる可能性があり、またロゴフォリックな照応形が存在することに起因する。³⁾

4. 日本語における *de se* の解釈

日本語には *de se* の解釈を要求するような構文は存在しないのだろうか。先に「たい」「たがる」に関して見たように、意味上の命題態度が統語的には動詞の接尾辞を通して表現される場合には、*de se* の解釈が事実上要求される。しかし、その解釈は統語的な義務的なコントロールの当然の帰結にすぎないから、意味上の制約とは言いがたい。*De se* 解釈がすべて統語的な要請によるものかを検証する過程のために我々が考察したいのは、日本語に、統語的な分析の帰結ではなく純粋に意味的な要請として *de se* 解釈が必要となる場面はないのかということである。以下、そのような要請があることを示す構文を2つ考察する。

まず、引用の補文標識を伴うが、補文述語が時制を持たない場合を見てみる。この場合は安定して同一主語制約が存在していると考えられる。(12b)に見るように意向形補文の主語が主文主語にコントロールされる空範疇である場合は文法的になるが、(12a)に見るように、意向形補文の構文では主文の主語と異なる補文の主語が排除されるからである。

- (12) a. *花子は [太郎が東京に行こう] と考えている
 b. 花子は [φ 東京に行こう] と考えている

しかし、(13a)に見るように、対比焦点として音形を持つ照応形の「自分」が主格助詞を伴ってここに現われうることから統語的には補文内に主語の位置があることが分かる。この点で、この構文は先に見た「たい」「たがる」とは異なっている。さらに、(13b)は、意向形補文では主文主語と異なる補文主語がすべて排除されるのではなく、補文主語の指標が主文主語の指標を包摂している場合には容認可能であることが分かる。⁴⁾

- (13) a. 花子は [自分が東京に行こう] と考えている
 b. 花子は [太郎ではなく娘と自分が東京に行こう] と考えている

これらの事実が明らかにしたのは、意向形補文の構文は補文主語の位置に主文の主語と非同指示の名詞句が現われうるため、義務的な同一指示という統語的な制約によってその分布を規定することはできないが、意味的には補文主語が態度保持者である主文主語を包摂するものに制限されているため、意味上の制約で *de se* 解釈が求められているということである。

上の議論では、統語的な特徴として、補文標識を持ち、補文内に時制辞がないということに着目した。その議論を通じて、日本語においては、*de se* の解釈の決め手となるのが音形を持たない空範疇の関与という統語的な特徴ではないことは分かったが、それに代えて補文標識の有無、時制辞の有無という統語的な特徴が *de se* の解釈の決め手になるという可能性については否定できていない。次に見る (14) は、得られる解釈は (12), (13) に示したものと全く並行的であるが、ここでは補文標識は現われず、さらに補文内には少なくとも表層的には時制辞が現われている。このことから、補文標識の有無、時制辞の有無もまた *de se* の解釈の統語的な決め手にはならないことを見て取ることができる。

- (14) a. *花子は [太郎が東京に行く] ことを決心した
 b. 花子は [φ 東京に行く] ことを決心した
 c. 花子は [自分が東京に行く] ことを決心した
 d. 花子は [太郎ではなく娘と自分が東京に行く] ことを決心した

同様のことは、(15) に挙げたような構文についても言える。(14) で埋め込み文が「こと」という形式名詞の内容節として埋め込まれていたのと同様に、(15) では、埋め込み文が「つもり」「気」などの名詞の内容節として置かれ、「つもりでいる」「気でいる」という連語で意志を表わす慣用表現の一部として使われている。(12) から (15) までに共通しているのは、統語的な特徴ではなく、未来に向けた話者の意志の態度表明だという意味論的な特徴である。従って、日本語においては、*de se* の解釈の決め手となるのは統語的な類ではなく意味論的な類であるらしいということが言えるであろう。

- (15) 花子は [東京に行く] {つもり, 気} でいる

次に、埋め込み疑問文を補文として取る「悩む」という動詞もまた *de se* の解釈を要求する場合があることを考察する。疑問節とともに現われる動詞の多くがそうであるように、「悩む」も典型的にはその補文が選択疑問文である場合は「かどうか」、補文が内容疑問文である場合は「か」を補文標識として用いる。

- (16) a. 花子は [東京に行く] かどうか悩んでいる。
 b. 花子は [どこに行く] か悩んでいる。

先に (12) 以降の例文に関して考察したのと同様に、「悩む」の補文主語の分布を見てみる

と、ここでもまた、態度保持者である主文主語と指標を共有しない補文主語は排除されるが(17a)、主文主語と同一指標の音形を持たない補文主語(17b)や、「自分が」を対比的強調のために明示した場合(17c)、そして主文主語の指標を包摂する複合表現を補文主語とした場合(17d)が容認可能であることが分かる。つまり、「悩む」という動詞の補文についても、統語的な理由ではなく意味論上の理由で *de se* の解釈が要求されているのである。

- (17) a. *花子は [太郎が東京に行く] かどうか悩んでいる
 b. 花子は [φ 東京に行く] かどうか悩んでいる = (16a)
 c. 花子は [自分が東京に行く] かどうか悩んでいる
 d. 花子は [太郎ではなく娘と自分が東京に行く] かどうか悩んでいる

ただし、「悩む」の補文に科された制約は、(12) から (15) で見た構文に関する制約よりも、いくぶん緩やかであることも観察できる。たとえば、(18) に挙げるような文は、どれも容認可能性が低いわけではない。

- (18) a. 花子は [その計算問題の答えが何 (である)] か悩んでいる
 b. 花子は [太郎がどうしてそんなことを言ったの] か悩んでいる

(18) の例文は、これまで見てきた例文と異なり、将来における行動についての思考や心理ではなく、客観的でおそらく時間とは無縁な真実や、過去に既に起こった事実が話題となっている。そのような場合は、補文主語の同一指示に関する制約自体が問題にならないと言えるだろう。また、これらの例文で補文標識「か」の直後に助詞「で」を添えると、容認可能性がさらに向上するということが観察される。これは、「悩む」という動詞に関しては、これまで見てきたように動詞の直接の項として疑問節を取る場合と、「～かで」という形で「～という問題に直面して」という意味を持つ副詞的補足節が文内に生起する場合があります。副詞的補足節に科される制約がより緩やかであるため、「で」が添えられていない場合も補足節として解釈して、補文内の主語に関する制約もより緩やかなものが適用されていると分析することが可能であるようにも思われる。

次に、再び、これから起こることに関わる例文として (19) を考察する。この文に関する母語話者の典型的な反応の一つは、補文を「娘にどの幼稚園に通わせるべき (であるか)」に変え、使役動詞の主語として音形を持たないが主文動詞の主語と同一指示の主語を設定すると、文がより自然になるというものであるが、これは (17) をめぐる議論から十分予測されることであ

る。また、この文においても(18)と同様、補文標識の直後に助詞「で」を添えると、より自然になるとの容認可能性判断が得られる。このように、(19)については、これを完全に容認可能な文と考えるべきなのか、それとも、いくぶん不自然さの感じられる文と考えるべきかについて躊躇いが残るが、(19)が(17a)に比べてはるかに容認可能性が高いのは、補文が「べきだ」というモダリティの表現になっていることに起因することは間違いない。

(19) 花子は [娘がどの幼稚園に通うべき (である)] か悩んでいる

「悩む」という動詞に関する観察をまとめると、この動詞の補文内には時制やモダリティについては多様な表現が用いられ、将来における行動の方向性が問題になる場合のみ *de se* の解釈が要求されるということである。つまり、この動詞に *de se* の解釈を強いるのは統語的な特徴ではなく、意味論的な特徴だということである。その意味で、*de se* の解釈についての要請が統語的な類によって規定されるという提案については、「悩む」は反例を提示していることになる。

5. まとめ

本稿では、不透明な文脈をめぐる意味論上の問題の一つとして *de se* 解釈を取り上げた。*De se* 解釈をめぐるのは、それが統語論上の特徴、とりわけ音形を持たない空範疇の存在に依拠するという分析がこれまで示されてきたが、日本語においては、*de se* 解釈が必ずしも補文内の空範疇や補文の時制辞、補文標識の有無に依存しておらず、音形を持つ補文主語の場合はその指標が主文主語と包摂関係にあるか否かや、補文の命題内容が未来に取るべき行動の方向性についてであるか否かといった明らかに意味論的な分析によって決まることを示した。

今後に残された課題としては、本稿で取り上げた構文はきわめて限られたものであるので、より多くの命題態度動詞について考察することによって、日本語における *de se* 態度の分析を精緻化していくことが望まれる。

<注>

- 1) 以下、どの言語でも同様な議論ができると考えられる場合は、例文を日本語に訳して示す。各言語特有の構文などに関わる事実については、元の論文で用いられた言語のまま示すこととする。
- 2) 日本語の再帰代名詞と logophoricity については、Sells (1987), Oshima (2004), 西垣内 (2015) などを参照。
- 3) 本稿では logophoricity 全般の分析には立ち入らないが、ここでの論考の範囲で言うならば、ロゴフォリックな「自分が」は de dicto の解釈を受けるという意味である。
- 4) ここで、包摂するとは、名詞句「娘と自分が」の指標 $m \oplus h$ から分配によって主文主語と同一指示となる h を得ることができるという意味である。

<参考文献>

- Chierchia, Gennaro (1989) "Anaphora and attitude de se", *Semantics and Contextual Expressions*, pp.1-31.
- Lewis, David (1979) "Attitudes De Dicto and De Se", *The Philosophical Review* 88, No.4, pp.513-543.
- Ninan, Dilip (2009) "De Se Attitudes: Ascription and Communication", *University of Washington Working Papers in Linguistics, Philosophy Compass*
- Oshima, David Yoshikazu (2004) "Zibun revisited: Empathy, logophoricity, and binding", *University of Washington Working Papers in Linguistics* 23, pp.175-190.
- Perry, John (1977). "Frege on Demonstratives", *Philosophical Review* 86 (4), pp.474-497.
- Quine, Willard van Orman (1956) "Quantifiers and Propositional Attitudes", *The Journal of Philosophy* 53, pp.177-187.
- Rooth, Mats (1985) *Association with Focus*, Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst
- Sells, Peter (1987) "Aspects of logophoricity", *Linguistic Inquiry* 18: 445-479.
- 西垣内泰介 (2015) "ロゴフォリック階層と視点投射", *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 18, 85-102.

On verbs that require *de se* interpretation

Yutaka Ohno^{*}

Abstract

One of the issues in formal semantics of propositional attitudes is the analysis of *de se* beliefs. In this paper, I will argue against analyses which claim that *de se* attitudes are defined for particular syntactic properties such as infinitival complements, and show that semantic rather than syntactic classes call for *de se* analyses.

Keywords:

formal semantics, propositional attitudes, *de se*, complement clauses, referential indices

^{*} Professor, Ritsumeikan University College of Science and Engineering
Chair, Ritsumeikan University Center for Japanese Language Education